The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モーラム芸に描かれた「東北タイのラオ人社会」：チャウィワン師の歌詞分析を通して
Author(s)	Worajinda, Wichaya
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46695
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏　　名	WORAJINDA（吉田）・Wichaya
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　20458　号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**モーラム芸に描かれた「東北タイのラオ人社会」ーチャウィワン師の歌詞分析を通してー**
論文審査委員	（主査） 教授　高岡　幸一 （副査） 教授　中　直一　教授　中埜　芳之

論文内容の要旨

『東北タイ』（通称イサーン）はタイ全国76県中19県が所在するタイ国東北地方であり、北と東はメコン川をはさんでラオスに接し、南はカンボジアと国境を共にする。その東北タイ社会のシンラパ・プーンバーン *sillápà・phúnbâan*（地域芸能）の代表として挙げられるのが、モーラム芸である。

伝統的モーラム芸は、モーラム *mŏ lam*（歌の熟練者）とモーケーン *mŏ khean*（ケーン竹笙の演奏師）によって構成される。モーラム芸は、歌い語り、伝えられる口承芸能として、長い間東北タイ住民の生活の中で息づき、日常生活に欠かせない身近なものとなっている。五十嵐によれば、東北タイにおける「宴会や祭では、『ケーン』という竹笛の楽器やイサーン民謡[1]が奏でられる。これらの抑揚のある哀愁を帯びた調べも、ラオス文化圏の痕跡を残している」と述べている［五十嵐勉編 1995：p124］。このように、モーラム芸は現在に至るまで東北タイの農村社会におけるラオ人（又はイサーン人[2]）を中心に、様々な祭りや儀式で行われ、伝承されてきた。一方、大内は「モーラム[3]はあくまでイサーン（東北タイ）の人たちの芸能であって、他の地方のタイ人に浸透することはない。ルークトゥン[4]（標準タイ語）を取り込んで『ルークトゥン・モーラム』という新しい形式のモーラム歌謡を誕生させても、この「民族」という厚い壁は破られることはない。モーラムはあくまでもモーラムで、イサーン語によって「ラム[5]」される限り、この『壁』を突き抜けることはどうしてもできない。モーラムのあるところイサーン人あり、イサーン人のいるところモーラムあり、である」と述べる［大内治 1999：p90］。口承されてきたラム（歌）は、東北タイのラオ農民の社会、歴史的や文化的の古さ、人々の思考的・情緒的の違いを理解するための「入り口」として重要であると考えられる。しかし、複雑な構成をもつモーラム芸は、国際的な知名度がありながら、学問的には、まだ充分に研究されているわけではない。特に、モーラム芸の中で最も重要視される歌詞内容についての研究が、日本ではまだ見当たらないことも確認されている。

本論文はこの『モーラム芸』を通して『東北タイ』を考察するものである。今日、モーラム芸の伝承のプロセスを

1 日本ではモーラム芸を「民謡」として紹介することが多い。
2 東北タイにするラオ系民族は、ラオス人と同じ共通性をもつ民族であるため、区別のために「コン・イサーン *khon Isan*（イサーン人）」と呼ばれる。
3 本論文では「モーラム芸」として示す。
4 タイ風田園調演歌。
5 「歌う」ことや「歌詞」の意味も持つ。

探ることは容易ではないが、近代に至るまでのモーラム芸の歌詞分析を通して、東北タイの社会、文化、歴史の一端を明らかにしたい。具体的には、タイの伝統的芸能である「モーラム芸」が、社会においていかに重要な役割を果たしているのかを分析し、さらに、東北タイにおける「ラオ人（又はイサーン人）」の社会構造、文化（言語、宗教、慣習、生活様式、などを含む）、国境を越える共通性をもつ東北タイとラオス両地域の人間関係などを見出したい。歌詞内容の中に「ラオ人社会」である東北タイの歴史・文化・信仰・生活・習慣・政治などがどのように反映されているか、言葉や表現を分析し考察する。

モーラム芸は、「イサーン方言 phasaă-Isan」（公用タイ語とは少し異なった、ラオス語に近い言葉である）で歌われ、あくまでも伝統的で古い様式の「口承」芸能であるため、その公演は今までほとんど記録されてこなかった。それゆえ、その公演をビデオで記録し、歌詞を詳しく書き留める本研究の作業は、伝統文化保存の資料として貴重であると考える。

本論文では、タイ国内外で「シンラピン・ヘンシャート *silapinhengchat*（人間国宝）」として認められている、モーラム一家の６代目であるチャウィワン・ダムヌン Chaweewan Dumnoen 師のモーラム芸を対象に考察し、彼女の公演を中心に記録とインタビューを行った（期間：2001 年５月～2005 年５月）。そして、代表する曲に焦点を当てて分析し、表現、詞型を明らかにすることを試みた。

本論文の構成は以下の通りである。第一章、チャウィワン師の経歴について紹介する。第二章、東北タイ社会におけるラオ系民族の住民によるモーラム芸がどのような構成を持つのかを理解し、モーラム芸の全体像を把握するために、行ったフィールドワークの結果を提示する。第三章～第五章、モーラム芸に関する基本知識（起源、分類、言語面など）について述べる。そして、第六章～第九章、チャウィワン師の代表的な歌詞の分析を通して、東北タイ及びラオ系民族の人々が大切に伝承してきた歴史、文化、習慣、信仰、意識などがどのようにモーラム芸の歌詞表現に反映されているかを考察する。第十章、タイ国中央の政府機関の影響を受ける東北タイ社会をみるために、住民が親しんでいるモーラム芸を取り上げた。

以上、本論文を通して明らかになったのは、モーラム芸が東北タイとラオスを中心に行われており、共通芸能であることは先にも述べたが、タイとラオス両国のラオ系民族の中で育まれた生活様式や行動様式、あるいは価値の体系ともいえる文化として、モーラム芸は伝承され、それぞれのタイとラオスという二つの国によって新しく生み出されてもきた。実際には、「タイ」と「ラオス」という国の違いから、自然風土、社会、生活環境、思想、人々の行動などにおいて、違いがあると考えられるため、そこに目を向ける必要も生じる。つまり、モーラム芸は独立した文化として存在するのではなく、自然と共に生きている人間やその集団を取り巻く、ラオ人社会における歴史や文化、様々な環境や諸条件と深くかかわって存在しているのである。さらに、東北タイの人々は超自然的存在を信じ、自然と共生し、尊び、それらに忠実につつましく生活している。人々の生活はとかく自然現象に左右されることが当たり前のように、自然はあるときは恵をもたらし、あるときは人々への脅威をふるうのである。このような、自然などの状況を反映するようなモーラム芸を民衆が日常の中で身をもって聞くことが重要な意味を持つのである。

本研究は、タイ側のモーラム（チャウィワン師）が描いた東北タイとラオスの関係を取り上げ、歌詞を通じて両国の関係に注目した。両地域の「平和な日常性」の裏側に、「モーラム師」という役目として、チャウィワン師は、人間性の複雑さの中に潜む奇怪さや微妙な感情を掬い上げる歌詞で表現している。これをうたうのも、やはり歴史的な知識あってのことである。歌詞を通して、歴史を読むことは、社会的事象をとらえることにつながる。

モーラム芸は歌い語る芸能であり、「歌詞」が最も重要である。特にイサーン方言に対する知識がない場合、モーラム芸の歌詞を正確に聞き取ることは困難な傾向がないとは言えない。しかしながら、歌詞の言語的な特徴と表現技法について、詩的な表現に多くの特長が見られる。モーラム芸も当然ながら近代社会の影響を受けているが、チャウィワン師は伝承されてきた歌詞の古い様式や方言を守りながら、独自の才能や特技を発揮して、新しい社会に即応した表現や内容を作り出してゆく。近代的なマスメディアを通して接触する、慣れない「標準語」や難しい「専門的な単語」より、今なお、タイ東北地方の民衆は、祖先から伝わり、親しんできたモーラム芸の「イサーン方言」および「いきた方言」の方が容易に情報を受け入れることができるのであり、それゆえ、モーラム芸が現代にいたるまで絶えることなく伝承され続けてきたと明言できる。

さて、モーラム芸には様々な役割があるが、仏教観に裏打ちされた、政から民へ、民から政へ、或いは住民から住民への社会的意識や人間性に触れる感情なども含めての情報として伝達されてゆく仕組みを述べたが、ゆえにモーラ

ム芸は近代化された社会にあわせつつも、モーラム師による個人的な深い知識や熟練された技術と高い才能の発露として行われている現状の中でチャウィワン師は登場したのである。チャウィワン師は「歌手」という立場でいながら「情報者」及び「師」としての責任を負うようになった。古くから、娯楽を目的として伝承してきた古い様式のモーラム芸は、公の場で人々の前で披露され、歌詞によってさまざまな教訓的教育を人々に習得させ、伝達されることに現代の今も大きな意義があるのである。

本論文では、チャウィワン師の代表的な歌詞のみを取り上げて分析を行った。他のモーラム師の歌詞の検討およびラオス側のモーラム芸との比較に関しては、今後の課題としたい。

論文審査の結果の要旨

ウォラジンダ・ウィッチャヤー君の論文は、タイの東北地方であるイサーン地方において郷土色を豊かに反映する民間芸能であるモーラム芸能を対象とした研究である。同君がこの地方の出身者であることから、この伝統芸能の領域において現在タイの人間国宝という肩書きをもつモーラム師、チャウィワン師に密着し、この師の舞台や講演およびインタビューを通して得られた知見を基にして考察・分析を行い、度重なるフィールド研究を積み重ねた諸成果の集大成ともなっている。なお、このモーラム芸能に関しては、従来日本の研究者たちによる簡単な言及や説明は成されているとはいえ、タイ本国においてもいまだ十分な学術的考察・分析に焦点が当てられていない現状にあり、同君の今回の研究成果は大いに価値のあるものと見なされうる。

本論文の構成は、序章のあと第1章から第10章までの章立てをもち、結論、参考文献、参考資料と276頁に及ぶ大部なものとなっている。序章に続き第1章から第3章までにおいて、同君は、モーラム師、チャウィワン師自身に焦点を当て、同師の経歴や社会的役割やフィールドワークを通じてのモーラム芸能のあり方を考察し、またこの芸能の起源や種類、音楽的な旋律や歌詞、踊りや楽器の問題などについて詳細に解説を施している。以下の各章にあっても同様であるが、論文の随所において、同君は現地で撮影した多くの視覚資料を挿入し説明・解説の便宜をはかって効果を上げている。

第4章以降はモーラム芸能における歌詞の内容に方向が向けられ、先ずは首都バンコックを中心とする標準タイ語に対してイサーン方言の性格について考察している。この言語がタイ語よりもむしろ東方のメコン河を越えたラオスのラオス語に近い言語であり、民族的にもイサーンの住民がラオ族としてラオス国の一部部族と類縁関係にあり、モーラム芸能も両国に誇る芸能として眺めるべき視点を同君は強調している。この点については、「モーラムに描かれた東北タイとラオスとの関係」という問題に一章を設け（第6章）、チャウィワン師自身の両国での活躍から、モーラムにも見られる両国間の歴史的関係の諸側面に光りを当てている。

第7章から第10章にいたる後半部においても歌詞に描かれる諸問題が扱われ、先ずは重要な問題として「信仰」の問題が登場する。タイは人口の98%が仏教徒という仏教国であり、ワットと呼ばれる寺を中心に僧侶階級の影響力が強力な社会を構成し、当然モーラム芸能の中でも小乗仏教の仏法僧の思想は色濃く反映されるが、実はそこには土着信仰から来るピー（霊）にまつわる土地神にたいする信仰の側面もまた同時に見られ、まさに日本における神仏習合的な一面にも通じる点特に興味を引くものがある。次に、タイの米倉とも見られるイサーン地方の性格は豊かな農民生活で特徴づけられ、また人たちの自然への関わりの重要性とともに些細な日常生活の細部がモーラムの歌詞に歌われる個所を紹介している。最後に、特異な点として興味を引く事柄は、マスメディアの伝達手段としてモーラム芸能が一役買っている点であり、政府の依頼を受け若者への交通災害防止や塩分不足によるヨウ素欠乏の予防策といったプロパガンダをモーラム師が担っている面もあると、同君は指摘している。

以上、ウォラジンダ・ウィッチャヤー君の研究は、長年にわたるモーラム師のチャウィワン師に接してのフィールドワークを通して、モーラム芸能に関わる全体像を詳細にかつ明快に解明した点にあるものと思われる。イサーンという土地柄に深く馴染んだ者でしか描き出せないオリジナルな論究であると言える。確かに、日本語表現の緻密な細部において今ひとつの堪能さが要求される側面はあるものの、この段階でも十分後学に資するものがあると確認した。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認める。